

遊びと生命



碓

浩

(福岡教育大学保健管理
センター所長・助教授)

人々にくつろぎと生き生きとした感情、そして何かなつかしい気持ちをおこさせる遊びとはいったい何であるうか。

この小論では、遊びを人間的な生命現象としてとらえ、考えてみたい。

I まなざしの中で遊ぶ

小犬のように走り回る幼児を思い浮かべてみよう。

幼児には、自分の活動に、遊びという枠をかぶせるひまがあまりはまらない。幼児の意識は、そのほとんどが、この不思議な外界に向けられている。五感を働かせて動き回ることに、熱中しているのである。自分がたのしんでいるという意識さえ、あるかどうかは不明である。しかし、見る大人にとっては、生命がその機能をその場で十分に発揮

していることはよくわかるし、見ることも自身が心なごむ遊びなのである。そして、それを表現するには、幼児が生き生きと遊んでいる、としか言いようがない。

このように、幼児の遊びの世界は、見守る者が名づけるものである。

しかも、この幼児の遊びの世界は、これを遊びと命名する「見守る大人のまなざし」がなくては土台、成立すらしない。

つまり、転んで怪我をせぬか、そろそろ家にいれないと風邪を引くのではないか、という心配(意識)を、見守る大人に任せているからこそ成り立つ世界に、幼児は生きていくといえる。

大人のまなざしの届く範囲内で、時間は「今」に滞留し、幼児は生き生きと「遊べる」わけである。

生命が外界と折り合って、その機能を発現するための、もろもろの条件を意識せずにおれるからこそ、幼児は自然に、生き生きとできる。とりわけそのまなざしは基本的に母親のものであることは言うまでもない。

では、幼児の生き生きとした世界は、一方的に母親の庇護的なまなざしに包み込まれた空間かといえは、そうではない。幼児が生き生きとできる空間の形成には、幼児の側も能動的に関与している。

幼児はひたすら遊びながら、かすかに、しかし注意深く、背後に母親のまなざしを意識している。不安になれば振り返ればよい、必ずそこには母親のまなざしがある、という幼児の意識が、事実、必ず近くのどこかにいる母親のまなざしと共同して、幼児の遊びの世界を保っているといえる。遊ぶ空間は、母親の実際の保護と、それに照応する、幼児の母親のまなざしに対する信頼によって成立している。この信頼感によってのみ、子ども達は冒険に挑戦できるし、一人で物事に対処できるようになるのである。

II いらない、いらない……、ば……

見えなくなった母親の顔が、再び現れ、微笑みかけるとき、幼児には、いい知れぬほどの発見の興奮がある。

生命の源泉にある不思議なリズムの発見。

「ないことの不安」が、「あることの安心」につながることを繰り返し学ぶ。それと共に、この時、自分の安全な空間の奥行きと生きた時間の流れを感じ得し、すでに遊べる空間を拡張はじめているのだ。それは世界に対する信頼であり、生きることの源泉である。

「小児は無垢であり、忘却である。新しい開始、遊戯、おのれの力で回る車輪、始原の運動、『然り』という聖なる発語である。そうだ、わたしの兄弟たちよ、創造という遊戯のためには、『然り』という聖なる発語が必要である。そのとき精神はおのれの意欲を意欲する。世界を離れて、おのれを獲得する」⁽⁵⁾

「然り」という聖なる発語は、母親の保護のもとで、乳児がまず母親のまなざしの中に見いだすのである。

外界の危険な混沌から仕切られた自由な生命的空間、それは母親のまなざしと、それを受ける幼児のまなざしによって形成された空間である。この保護された遊戯空間が幼児の生命活動の舞台である。

まなざしの消失は破綻であり、無である。狂気であり、死である。

それは、浜辺で無心に砂山を築いては崩し、築いては崩し遊んでいた幼児が、ふと母親のまなざしの不在に気づき、途方に暮れる姿を想い起こせばよい。この時、それまでキ

ラキラと虹色に光り輝いていた砂の一粒一粒が、一挙にざらついた不快な感触でまとわりつくのみの、無機物に変ずる。あれほど関心を向けていた砂山は、幼児にとって、もはやなんの意味もない。

III 自らをつつむまなざし

大人が幼児と同じように、生命そのものと一体化の世界を生きる（すなわち、遊ぶ）ためには、幼児に対して行っている配慮と同じものを、自分に対して行わなければならない。その意味で遊びは、先ず自我の分裂、見ている大人の自分と見られている幼児の自分との間の、心的な距離が前提といえよう。

遊びは、人間の存在自体のなかに掘りうがたれていて、人間に自己自身から距離をたもたせ、人間を対自的に存在させるものである。このような本質的な意味においては、遊びはなんらかの行動の形式によって定義づけられるものではない。それは人間の主体的な態度であり、行為である以前に意識である⁽¹⁾。

かつて母親のまなざしのあったところに、自分をおき、自らを包む構造を維持し、世界と交渉しつつ、世界から自分を守り、あらたなる生成を続けるような意識のありようである。

「私の前には、私の活動性と私の生命をなんの支障も受けず繰り広げることができ、自由な空間のようなものがつねにある。私は、私が前にしているこの空間のなかで、くつろぎを感じ、自由を感じる。自我と周囲の生成の間には、物理的意味での、直接的接触はない。私と周囲の生成との接触は、われわれを互いに結合している『距離』を越えて、あるいはむしろこの『距離』に助けられて、実現されるのである。」

と、ミンコフスキーが描写する時、この自由な空間が本来、母のまなざしに起源のあることを忘れていないだろうか。

IV 遊びを構成する生命活動

(1) 環境と共調する生命のリズム

赤ん坊は、あらゆる生命体と同様に、リズムで身体を満たしている。

心臓の拍動、呼吸、泣くこと、笑うこと（乳児は、生後三か月ではほえみをうかべる）、覚醒と睡眠、もろもろの生理現象、飢えによる全身にみみぎる緊張と充足による安らぎ、それらは生命の基底をなすリズムである。この赤ん坊の個別のリズムは能動的に母親と共調（シンクロナイズ）して生命の音楽を生成発展させる。受胎後約六か月で、子宮内の胎児は、すでに聴くことを始め、誕生の直後に、新生

児は母親の声にあわせてリズムミカルに動き、さらに、それが何語であれ、他人の声に共調するのである。

母親は乳児に応え、授乳により乳児の緊張に安らぎをもたらし、抱擁により母親の肌のぬくもり、胸の鼓動を伝え、子守歌とともに乳児のからだを揺する。すべてが生命的なリズムとして共調する。外界との生命的な融合、秩序ある混沌を目指す。

「あそびの理論はつぎに、切株と輪、こまとムチ、おはじき玉と棒、といった謎にみちた二つひとつくみのものを研究し、二つのあいだに生じる磁気作用を探究しなければならぬだろう。……まさにそういうリズムを手がかりにして、わたしたちは、はじめて自分というものをつかまえるのである。……あそびの世界が個々の規則やリズムをすべて支配している」

赤ん坊が、最初に自分というものをつかまえる手がかりとする、「謎にみちた二つひとつくみのものあいだに生じる磁気作用」とは、赤ん坊と乳房（あるいは、すべての母親の保育）のあいだに形成される。

強い授乳衝動を向ける母親によって、当初、赤ん坊はほぼ完全にみだされる。混沌の中でかすかな飢えによる緊張感が湧く。乳房が差し込まれ、母乳が口腔内に広がり、安らぎが戻る。

緊張と安らぎ、その繰り返し。赤ん坊にとっては、これは自律的な生リズムである。やがて哺乳の力を増し、それとともに飢えによる緊張感が高まるようになる。母親の授乳が遅れたり、不完全である場合もある。しかし、その不完全さゆえに、乳児のリズムを求めめる能動性は執拗となっていく。

母親と乳児が共同して作り上げる快—不快のリズム、いわばこの音楽的質こそが、ほかならぬ、個別のその乳児の生の奏でる音調となる。世界の危機的混沌を自らの音楽で包み込むのである。

モーツアルトの軽やかな天に駆け上がってゆくような世界の自在な広がりに、ベートーベンの重く張り詰めた地鳴りのする中で危機をはらんだやすらぎも、各々の固有の生存のリズムである。

(2) 環境から自立する生命

……内と外、自他の境界膜
内と外、そして境界。生命にはあらゆるレベルでこの分ける働きがみられる。

細胞について考えてみる。
生命の構成単位である細胞は、細胞膜によって細胞外と仕切られている。細胞膜を持たない細胞は地球上に存在しない。

細胞膜の機能はきわめて多彩である。先ず細胞膜は境界を設定する。しかもこの膜は選択的な透過性があり、常に外界の物質を取り入れ、また排泄している。

細胞は自給自足は出来ない。エネルギー開放系であり、常に外部環境と上記のような様々な交渉を行わなければならない。すなわち構造として独立している細胞は、生命としては環境に完全に依存している。生命と環境は両者の相互浸透によって存在しているわけであるから、生命系として把握しなければならない。そして生命系を部分と全体、内と外に分けるのが細胞膜の機能である。

ここには膜によって外部の無秩序と内部の秩序が、相互に関係を持ちながら一つの生命単位である世界が繰り広げられている。

数十兆という細胞が組織、器官に分化し、最高度に機能が統合されている人の身体も、すべての表面が外と仕分けるための皮で覆われ、徹底して内と外を隔て、かつ外との巧妙な交渉によって、外部の養分を摂取し、内部の老廃物を排泄している。このことによって内部の秩序を維持、発展させている。

(3) 遊戯空間の形成

人がこの世に誕生して、生きてゆくことも、漠とした生存の感覚にただよう状態から、身体の内と外を仕分ける境

界線のような身体感覚を生成し、外と関係しつつ内を確立するプロセスと考えることができる。

飢えたときに、あのおっぱいの柔らかなあったかい感触と、口腔を満たす母乳の味わいが、一定の時間内に再現しないと、そのとき乳児は積極的に、指しゃぶりで満たされた世界を維持しようとする。

小児科医であり、精神科医であったウィニコット⁽⁷⁾は、このときの乳児の指を移行対象 (transitional object) という。そして、この移行対象に人間の遊びの原基があると主張する。

外からみると、このとき乳児は偽物のおっぱいによって我慢しているように感じるが、実は乳児は、一時的に自分が創り出したおっぱいで満たされている、というのがウィニコットの重要な発見である。

移行対象は指のほかにからかな毛布のはし、タオル、縫いぐるみの人形、あるいは「うま、うま」というような、おっぱいを吸っているときの声など、あらゆる満たされた感じを呼び起こすものが利用される。

このようにして、乳児は自分の身体や、手近にいつもあるもの、自分の声、遂には自分の言葉を用いて、身体的な現実の欲求満足とは違う、しかし満たされた魔法の世界、すなわち遊戯の世界 (潜在空間、potential space・ウィニコット

ト)を作り出す。乳児は、生物としての自分を真に満たすもの以外の何かと幻想的関係を持ち、自分を満たすことを始める。生物学的生命プロセスの存在となるのである。

同時にそれは自立への第一歩である。

つまり、外界と乳児とのあいだは、遊戯する空間という幻想領域によって隔てられ、内と外という、漠とした感覚の萌芽がそこに現れる。乳児は、環境(母親)と共調し、融合することによってのみ成り立った生から、能動的に自立と創造の間、自己秩序の形成を目指す。フロイトが言うように、「自我はまず第一に身体的自我である。すなわち、自我は究極的には身体的感覚から生じる⁽³⁾」のである。それは辛抱強く、かと言って決して苦勞とは思わず、子どもの成長に応じて、徐々に子どもから距離を取ることのできる母親と子どもが、共同して作り上げた世界であり、客観的現実世界とも、欲求に支配された子どもの心的世界とも違う、遊具によって両者が関係し合う世界である。この遊戯空間の内部のみ、人間は創造的に、すなわち幻想を武器として世界を豊かにすることができるのである。

「老いてがんぜない子供に返ると人はいうが、そうではありません。老いてこそ、本当の子供になるのですよ」

……ゲーテ(ファウスト)

ゲーテのこの言葉は、遊びの本質を生き生きと表現して

いる。

ほたん雪の降りしきる庭で、喜々として走りまわる幼児のような自分に、優しいまなざしをやる老いた自分、この言葉をなかだちとしてあらわれる見る、見られる関係に、人間の生命、すなわち、遊びがある。

〔参考文献〕

- (1) アンリオ・J…「遊び」(佐藤信夫訳)白水社、一九八一。
- (2) ベンヤミン・W…「教育としての遊び」(丘澤静也訳)晶文社、一九八二。
- (3) フロイト・S…「宗教論―幻想の未来」・「フロイト選集8」(土井政徳・吉田正巳訳)日本教文社、一九七〇。
- (4) ミンコフスキー・E…「生きられる時間―2」(中江育生・清水誠訳)みすず書房、一九七三。
- (5) ニーチェ・F…「ツァラトゥストラ」(手塚富雄訳)中公文庫、一九七三。
- (6) ホール・E・T…「文化としての時間」(宇波彰訳)TBSブリタニカ、一九八三。
- (7) ウィニコット・D・W…「遊ぶことと現実」(橋本雅雄訳)岩崎学術出版社、一九七九。

